

資料配付の場所

- 1.国土交通記者会
- 2.国土交通省建設専門紙記者会
- 3.国土交通省交通運輸記者会
- 4.筑波研究学園都市記者会

平成27年 1 1 月 3 0 日
国 土 交 通 省
国土技術政策総合研究所

広場のレイアウトを工夫し、まちに賑わいを！ ～現地で実験を行い、鍵となる人の動きを分析しました（速報）～

国総研では、都市内広場の大きな樹木やベンチ等の配置が歩行者の行動に与える影響を把握するための実験を行いました。これは、まちの賑わいを創出するため、広場をより多くの人に有効に利活用していただくための調査の一部として行ったものです。

実験の結果、植栽や店舗等で形成される空間のまとまりが歩行者の動きや座席利用等の行動に影響を及ぼしていることが視覚的に確認され、広場のレイアウトの工夫により空間の質や居心地の良さ等を高められる可能性が確認できました。

今後は、実験で得られたデータの分析を進め、快適でより多くの歩行者に利活用される広場づくりに役立ててまいります。

1. 実験の背景と目的

国総研では、中心市街地活性化のために、人の動き等を把握する研究を行い、『賑わいづくり「施策」発見マニュアル』^{*}を発出しています。その一環として、中心市街地等における広場が多くの人に憩いの場や交流の場として活用されるよう、広場の質の向上を図るための調査を行っています。（※<http://www.nilim.go.jp/lab/jcg/index.files/nigiwai.pdf>）

その調査の中で、今回、コンパクトシティに向けた先進的な取組みが進む富山市の「富山グランドプラザ」内の半屋外広場において、大型植栽やテーブル・ベンチ等の配置パターンを複数設定し、歩行者の移動経路や滞留、会話、飲食等の行動変化を把握しました。

2. 実験の概要（別紙参照）

- (1)場所：富山グランドプラザ（富山市）
- (2)調査日：10月15日（木）～21日（水）の平日5日間
- (3)調査手法：調査員の目視による歩行者の行動把握
 - i)スタティック・ログ（滞留行動の定点観測記録）
 - ii)トレース（移動軌跡の追跡記録）
 - iii)ゲートカウント（周囲の歩行者交通量のサンプリング調査）
- (4)レイアウト：要素のまとまり具合や周辺店舗との位置関係等から線型/集合型など5パターン設定

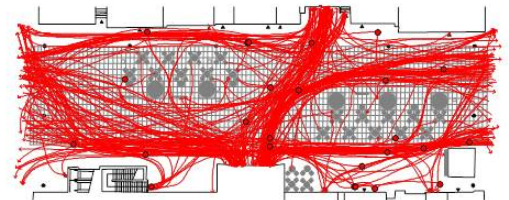


図. 植栽等レイアウト及び歩行者の移動軌跡の例

3. 確認された主な行動結果（速報）

- ・植栽や店舗等により空間のまとまりを確保することで、より多くの滞留（座席利用等）が発生。
- ・レイアウト変更に伴う動線変化の想定以上に、移動軌跡の分布パターンが大きく変化。

例えば、空間のまとまり（囲われ感）が強い場合、居心地の良さを阻害する恐れのある「囲われ空間」内の「通り抜け」が減少。

- ・主動線からの距離により座席利用状況も変化。

→これらの結果は、広場のレイアウトの改善により、各々の広場に適したアクティビティを促進させる可能性を示唆。

4. 今後の展開

今後は、実験で得られたデータを用いて、広場における人と人とのつながりや出会いにも着目して分析を行います。さらに、快適でより多くの歩行者に利活用されるような広場づくりの考え方を示すマニュアルを作成し、全国展開を図ります。

【問合せ先】 国土技術政策総合研究所 都市研究部 都市施設研究室 新階、吉田

電話 029-864-3952、029-864-3949（新階、吉田） FAX 029-864-6776

実証実験 調査概要

国土技術政策総合研究所 都市施設研究室

実験の概要・目的

期間：平成27年10月15日（木）～平成27年10月21日（水）（うち平日の日中6時間×5日間）

場所：富山県富山市総曲輪三丁目8番39号「グランドプラザ」

実験内容：広場内の座席、植栽の配置パターンを変更させることによる、広場利用者の利用（滞留・歩行）状況の変化を確認

目的：広場レイアウトと利用の関係性を明らかにし、その結果を通じて、広場空間の質や存在価値の向上、周辺への波及効果を目指す。

調査手法：①スタディック・ログ（滞留行動の定点観測調査）

②トレース（移動軌跡の追跡調査）

③ゲートカウント（歩行者通行量分布のサンプリング調査）

実験結果（速報）

①滞留者の観測数：滞留者 約2,200人（5日間・各日6時間（計30時間）の滞留者数）

（広場流入者の概ね8%＊が滞留）

②移動軌跡の観測数：約910サンプル（人）

（広場流入者の概ね3%＊を観測）

＊（広場への流入者数推計値）
→ 1時間あたり 約 875人
→ 30時間あたり 約26,250人（全調査期間中の流入者数）

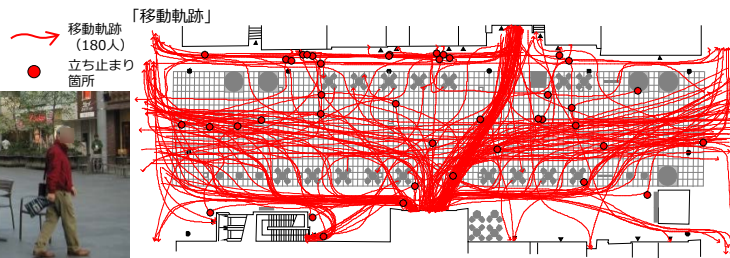
得られた知見

①植栽や飲食店などによって、滞留区間に領域性を確保することにより、より多くの滞留活動が発生することを確認。（配置パターンに応じて滞留者数が変化）

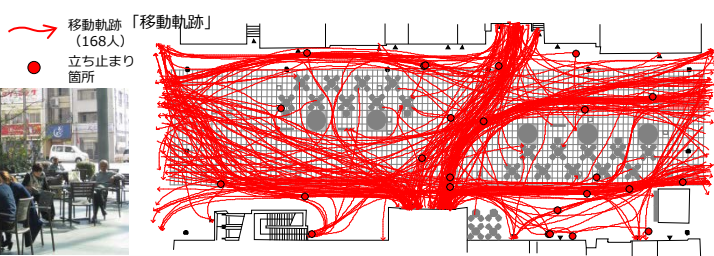
②座席や植栽の配置の違いに応じて、移動軌跡の分布パターンが大きく変化し、滞留空間の使われ方が変化することを確認。（テーブル間の通り抜け状況が変化。また、動線からの距離に応じて座席の利用状況が変化。）

→ 広場内のレイアウトを改善することにより、広場空間の質を向上させ、その広場に適したアクティビティを促進させることが可能となる。

15日（木）



21日（水）



実験当日のレイアウト状況

（❖：テーブル・イス、●：植栽、—：ベンチ）

15日：テーブル・イス、植栽を直線的に配置

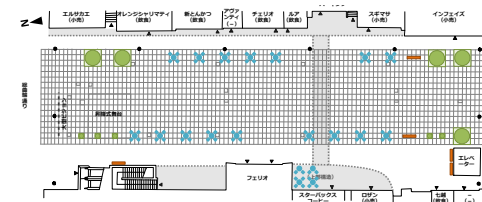
16日：広場中央に向けてテーブル・イス、植栽を配置

19日：テーブル・イス、植栽をランダムに混在させて配置

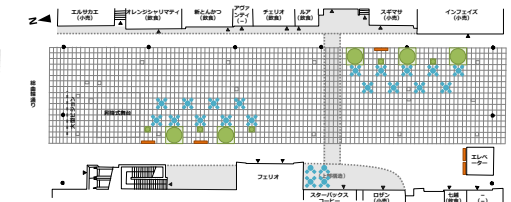
20日：テーブル・イス、植栽を飲食店のない壁側に寄せて配置

21日：テーブル・イス、植栽を飲食店のある壁側に寄せて配置

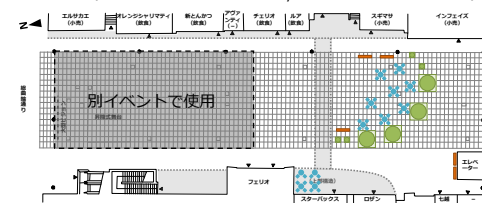
15日（木）：滞留者数 延べ約77人/時間



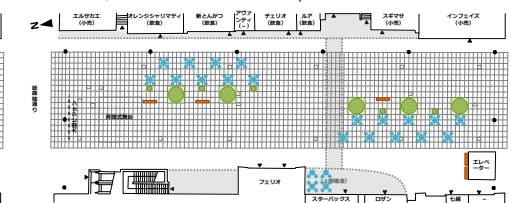
20日（火）：滞留者数 延べ約75人/時間



16日（金）：滞留者数 延べ約47人/時間（広場半面のみ観測）



21日（水）：滞留者数 延べ約92人/時間



滞留の様子（20日（火）12：45頃 広場南側の様子）

